

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	ナノ材料転写技術を基盤とした薄膜エレクトロニクスの開発と医療デバイスへの応用
Title(English)	Development of Thin-Film Electronics Based on Nanoscale Materials Transfer Methods and Their Applications for Medical Devices
著者(和文)	齋藤優人
Author(English)	Masato Saito
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京科学大学, 報告番号:甲第329号, 授与年月日:2025年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:藤枝 俊宣,徳田 崇,西山 伸宏,岡田 智,小倉 俊一郎
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Institute of Science Tokyo, Report number:甲第329号, Conferred date:2025/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名	齋藤 優人	
論文審査 審査員		氏名	職名	氏名	職名
	主査	藤枝 俊宣	教授	小倉 俊一郎	准教授
	審査員	徳田 崇	教授		
		西山 伸宏	教授		
岡田 智		准教授			

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は「ナノ材料転写技術を基盤とした薄膜エレクトロニクスの開発と医療デバイスへの応用」と題し、日本語で書かれ、全六章より構成されている。

第一章「序論」では、本研究の研究背景として、既存のフレキシブルエレクトロニクスや高分子薄膜の作製技術、ウェアラブル・インプラントデバイスの研究開発動向について述べるとともに、熱と光を中心としたエネルギーの送達によるがん治療について概説している。

第二章「研究目的および論文構成」では、本研究の目的としてエネルギーの局所送達可能なデバイスの実現を提起するとともに、論文全体の構成および各章の概要について述べている。

第三章「PDLLA 薄膜への印刷配線転写技術の構築とデバイスへの応用」では、金ナノインクからなるインクジェット印刷配線を、医用高分子の一つであるポリ-D, L-乳酸 (PDLLA) 薄膜上へと転写させる手法の構築に取り組んだ。具体的には、高い耐熱性を有するポリイミドフィルムを印刷基材に使用して金ナノインクを印刷、焼成した後に、PDLLA 溶液を印刷配線表面に塗膜した。この時、ポリイミドと金の相互作用よりもポリ乳酸と金の相互作用が高い状況にすることで、金配線をポリイミドフィルムから PDLLA 薄膜に転写する手法を考案した。本手法により、耐熱性に乏しい PDLLA 薄膜上に高温焼成によって優れた導電性能を有する印刷配線を搭載することに成功した、と述べている。さらに、がん温熱療法への応用を見据えて、非接触給電にて加温可能な発熱デバイスの開発にも取り組んだ。具体的には、誘導加熱の原理で発熱する薄膜状発熱デバイスを考案し、同心正形状コイルのサイズを検討することで交流印加による発熱挙動の制御を可能にし、血流が豊富な肝臓表面においても発熱デバイスを作動させることに成功した、と記している。

第四章「レーザー誘起グラフェン (LIG) を用いた光熱変換薄膜の開発」では、第三章で考案した印刷配線転写技術の他のナノ材料への応用について取り組んだ。具体的には、ポリイミドフィルム表面に、CO₂ レーザー加工機を用いて生成した LIG と金ナノインクからなるインクジェット印刷配線をそれぞれ作製し、これらの導電体を PDLLA 薄膜上に転写することで薄膜状発熱デバイスを作製した。この時、PDLLA 薄膜に LIG を転写する前後での発熱性能について、LIG への直流印加による抵抗加熱を通じて生じる発熱挙動と、LIG への近赤外光照射による光熱変換を通じて生じる発熱挙動をそれぞれ比較したところ、PDLLA が LIG からの放熱を抑制することで高効率な発熱が達成されることを見出した。また、がん細胞に対する温熱作用の評価では、レーザー照射によって任意の形状にデザインされた LIG の形に沿って局所的な細胞死を誘導することに成功した、と述べている。

第五章「印刷配線転写技術を応用した光線力学療法向け薄膜状発光デバイスの開発」では、薄膜エレクトロニクスのメトロノミック光線力学療法への応用を見据えて、LED によって微弱光を長時間照射し続けることが可能な薄膜状発光デバイスの開発に取り組んだ。具体的には、印刷配線転写技術を用いて、PDLLA 薄膜上に平面コイル配線を転写し、コイル性能に応じた整流回路を設計することで薄膜状発光デバイスを開発した。デバイスの発光性能をもとに、がん細胞および担がんモデルマウスを用いた *in vitro* ならびに *in vivo* 試験を通じて、光照射部位に局所的な細胞死を発現させること、また、従来のレーザー光を用いた光線力学療法と比べて効率的な抗腫瘍効果を誘導することにそれぞれ成功した、と論じている。

第六章「本研究の総括と将来展望」では、種々の薄膜エレクトロニクスを用いてエネルギーの局所送達を実現した本研究の全体を総括し、本研究の意義および今後の展望を述べている。

以上を要するに、本研究は、薄膜エレクトロニクス開発のための要素技術となる、高分子薄膜へのナノ材料転写技術を確立し、当該技術を用いて発熱および発光の機能を有する医療デバイスを創製することで、医療分野における局所的なエネルギー送達の有用性を実証したものであり、工学上ならびに工業上貢献するところが大きい。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として十分な価値があるものと認められる。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東京科学大学リサーチポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。